
コンピュータ科学特別講義Ⅳ

Parallel Algorithm Design (#4)

Masato Edahiro

June 1, 2018

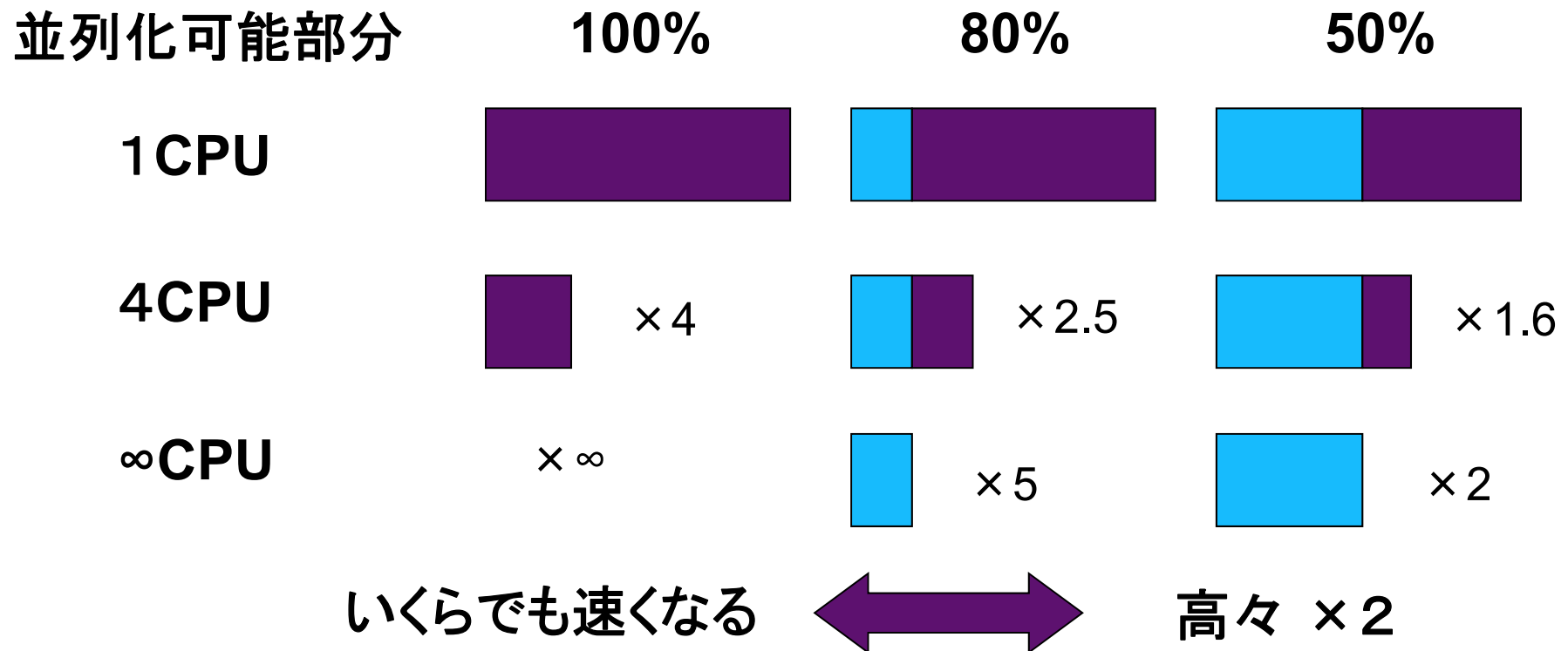
Please download handouts before class from
<http://www.pdsl.jp/class/utyo2018/>

Contents of This Class

- Our Target
 - Understand Systems and Algorithms on “Multi-Core” processors
- Schedule (Tentative)
 - #1 April 6 (= Today) What’s “Multi-Core”?
 - #2 April 13 : Parallel Programming Languages (Ex. 1)
 - April 20, 27, May 4, 11, 18: NO CLASS
 - #3 May 25 : Parallel Algorithm Design
 - #4 June 1 (Fri) : Laws on Multi-Core
 - #5 June 8 : Examples of Parallel Algorithms (1) (Ex. 2)
 - June 15: NO CLASS
 - #6 June 22 : Examples of Parallel Algorithms (2)
 - #7 June 29 : Examples of Parallel Algorithms (3)
 - #8 July 6 : Examples of Parallel Algorithms (4)
 - #9 July 13 : Examples of Parallel Algorithms (5) (Ex. 3)
 - (July 20)

Amdahlの法則

- プログラムの中で、並列化可能部分の割合が大きくなければ意味がない

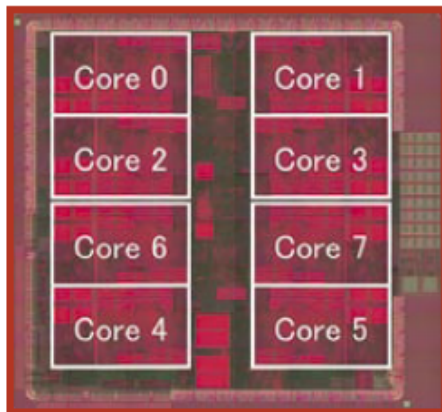


パレートの法則（80:20の法則）

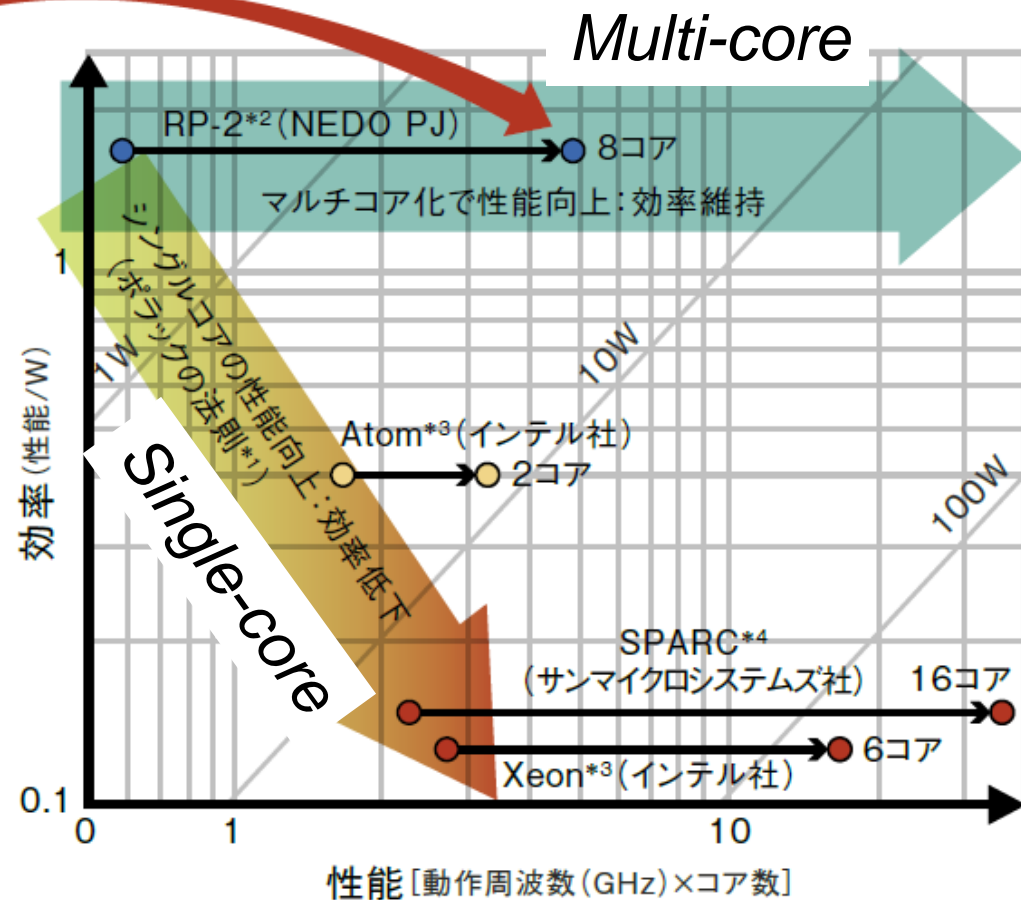
- 「プログラムの処理にかかる時間の80%はコード全体の20%の部分が占める」という経験則
- 注：パレートの法則自体は世の中の様々な現象に使われる法則であり、プログラムは一例
- Amdahlの法則において、プログラム実行の80%を並列化したいとき、パレートの法則に則っていればコードの20%に関する並列化検討をすればよいことになる

Pollackの法則

- プロセッサの性能はその複雑性の平方根に比例する（経験則）



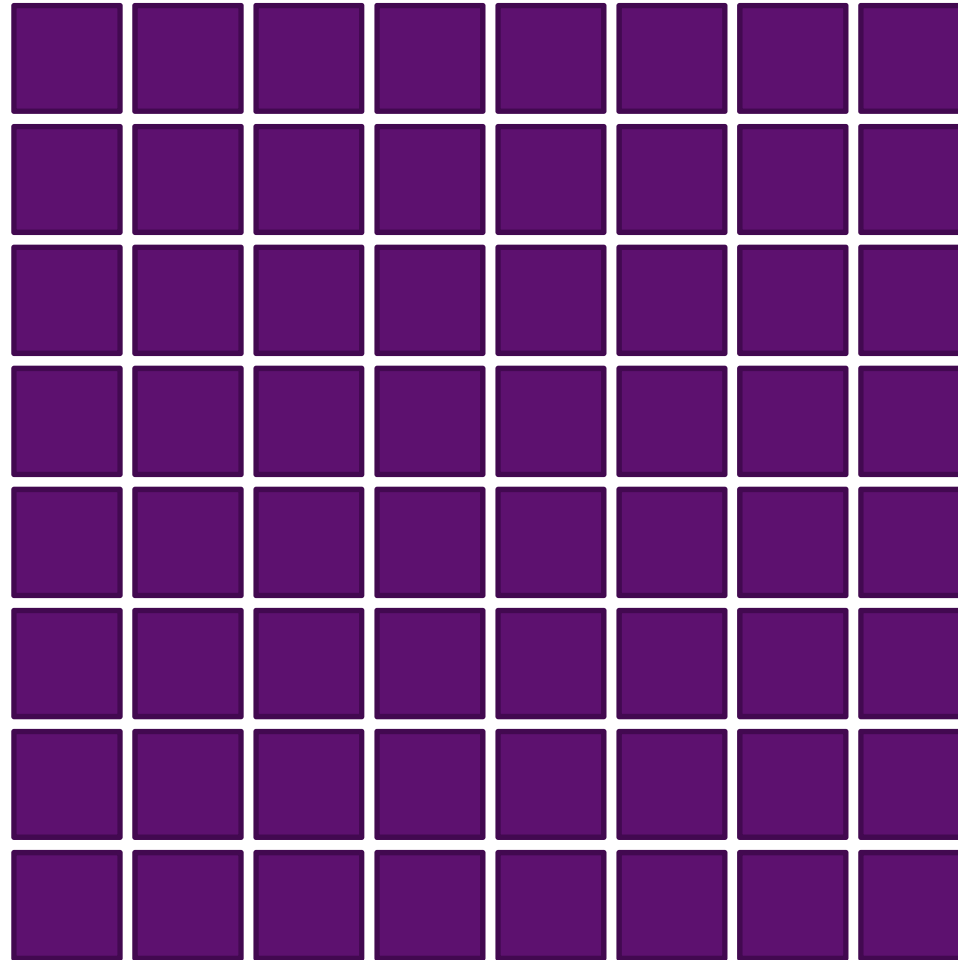
シングルコア・マルチコアチップの性能と効率の関係



メニーコア向けAmdahlの法則の拡張

- 並列化可能部分はメニーコア実行がよいが、並列化不可能部分は高性能な単一コア実行がよい
- メニーコアの3シナリオ
 - 対称型
 - すべてのコアが同じ能力を持つ（通常のAmdahlの法則と同じ）
 - 非対称型
 - 一つの高性能コアと複数の軽いコア。ただし命令セットはどちらのコアも同じ（同じバイナリが動く）
 - 動的変更型（現在の所理想論）
 - あるときには高性能コア、あるときにはメニーコア
- 4個のコアと同じ面積で4倍性能の単一コアができるわけではない
 - $Perf(r)$: r 個のコアと同じ面積を単一コアで使ったときに出せる性能→ここでは \sqrt{r} （Pollackの法則）

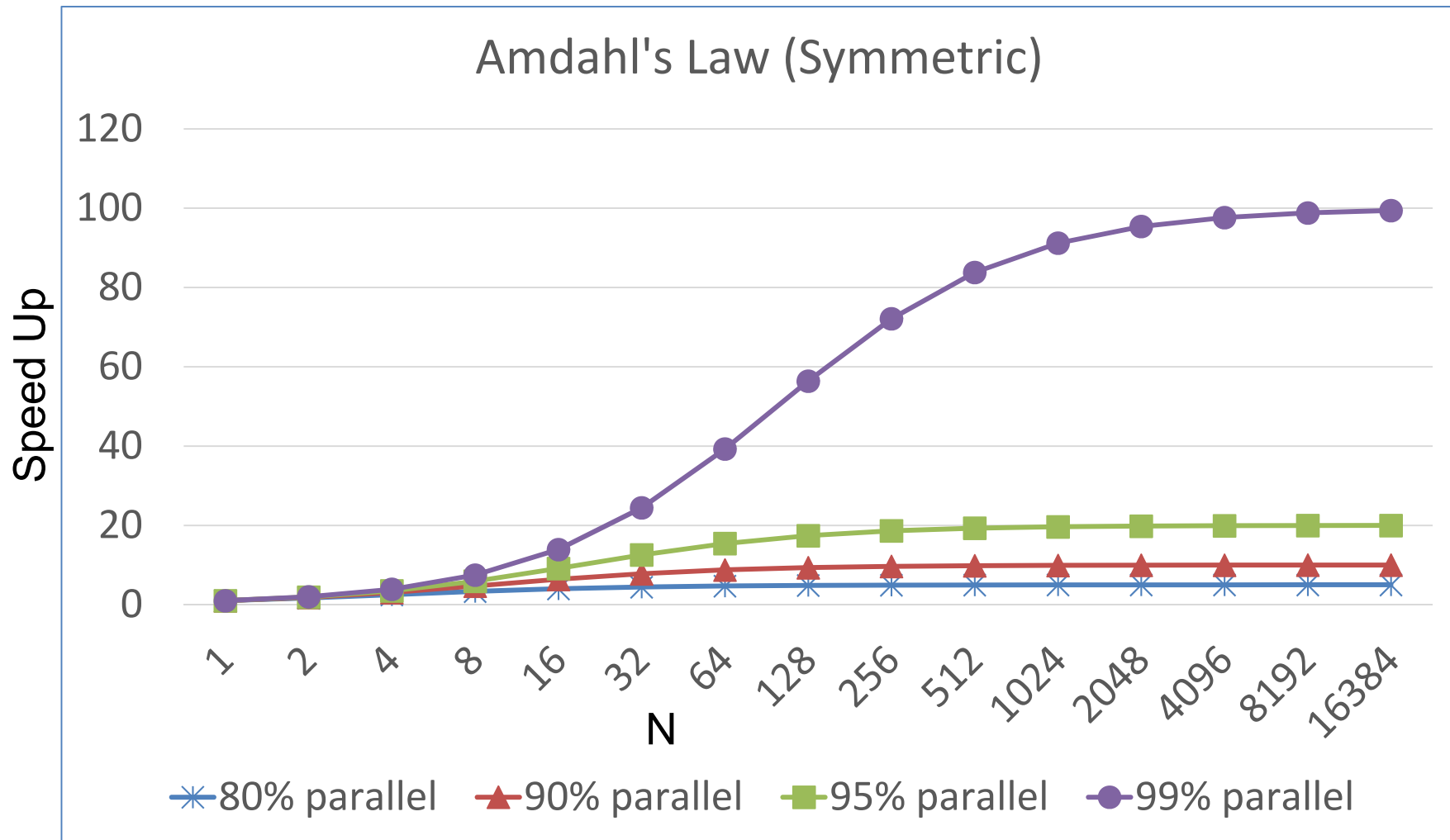
メニーコア（対称型）



Amdahlの法則（対称型）

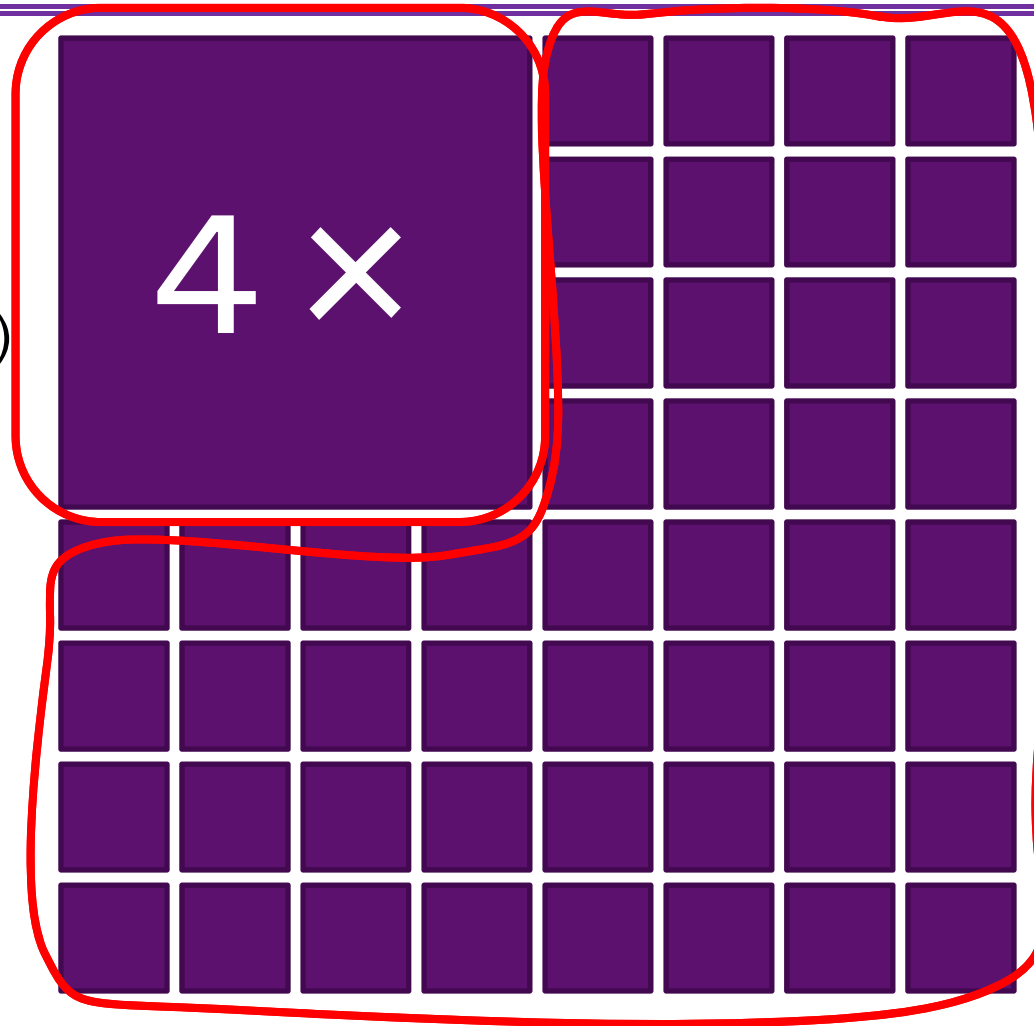
- P: 並列化可能な割合
- N: プロセッサ数
- Speed Up?

アムダールの法則により飽和してメリットがなかなか活かせない



非対称型（逐次処理のために高速CPUを）

$\text{Perf}(r) \times 1$
(Use for all part)

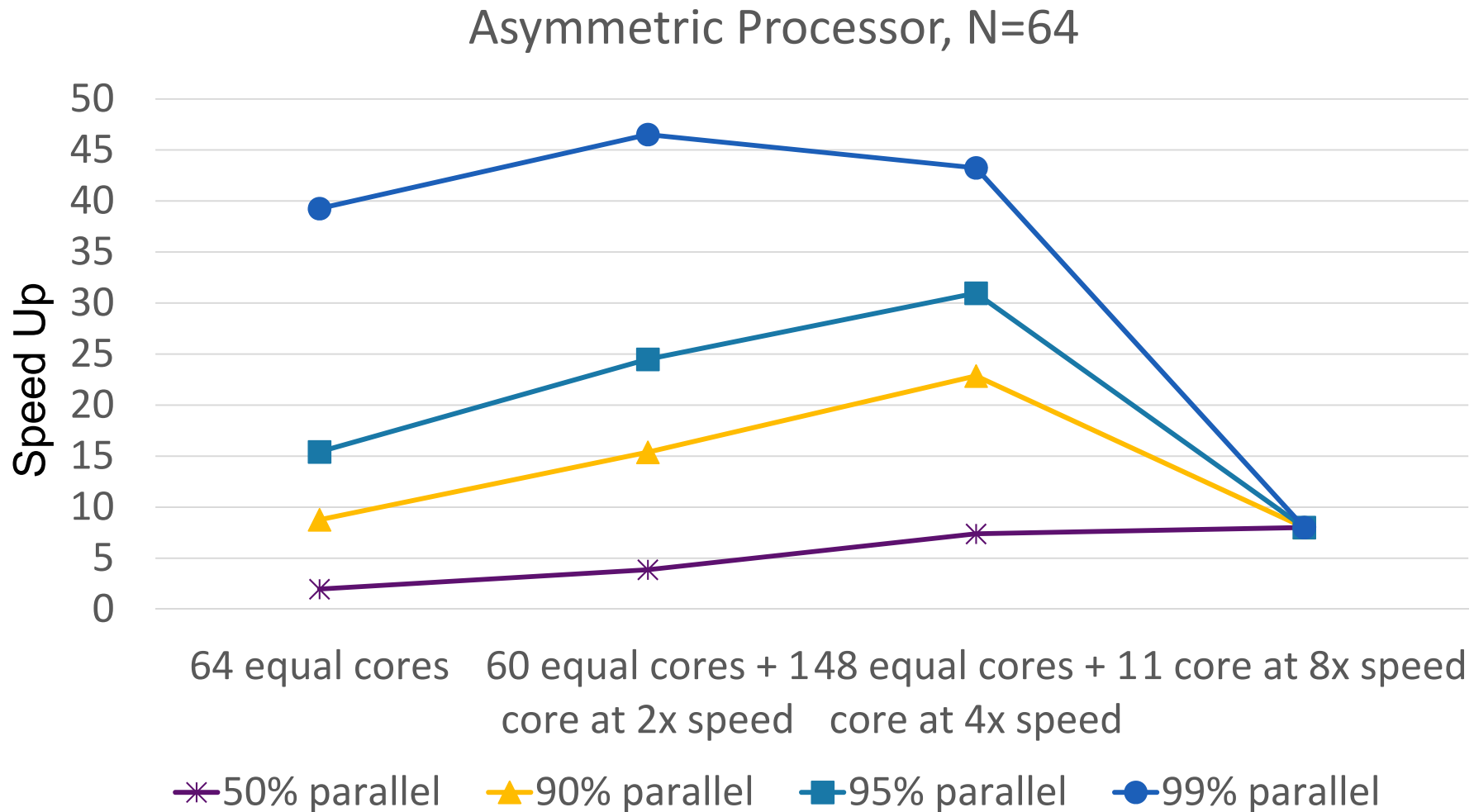


$1 \times (N - r)$
(only for
parallelizable
part)

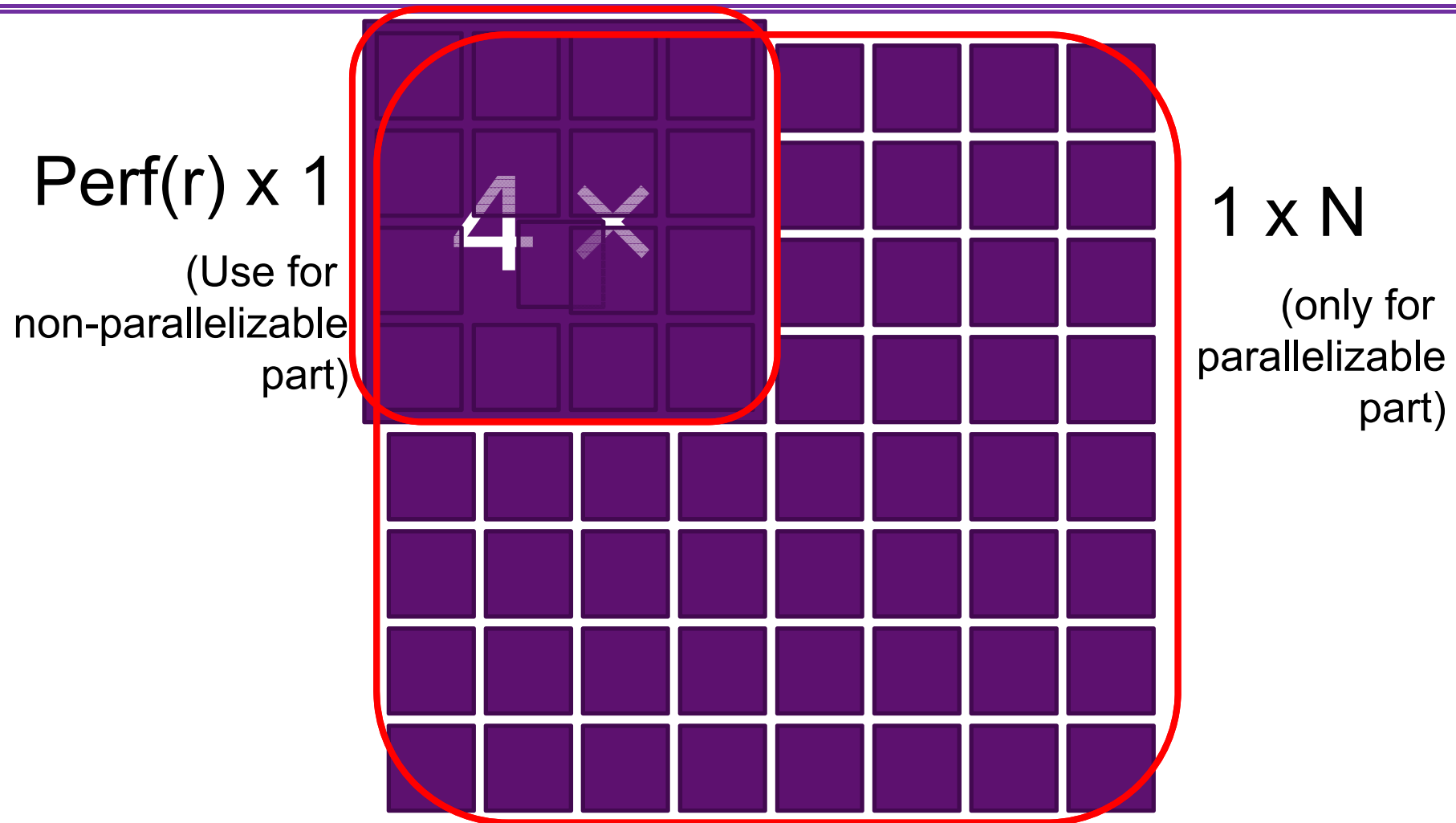
Speed Up?

Speed Up?

性能が最も高くなる構成がアプリ依存になる



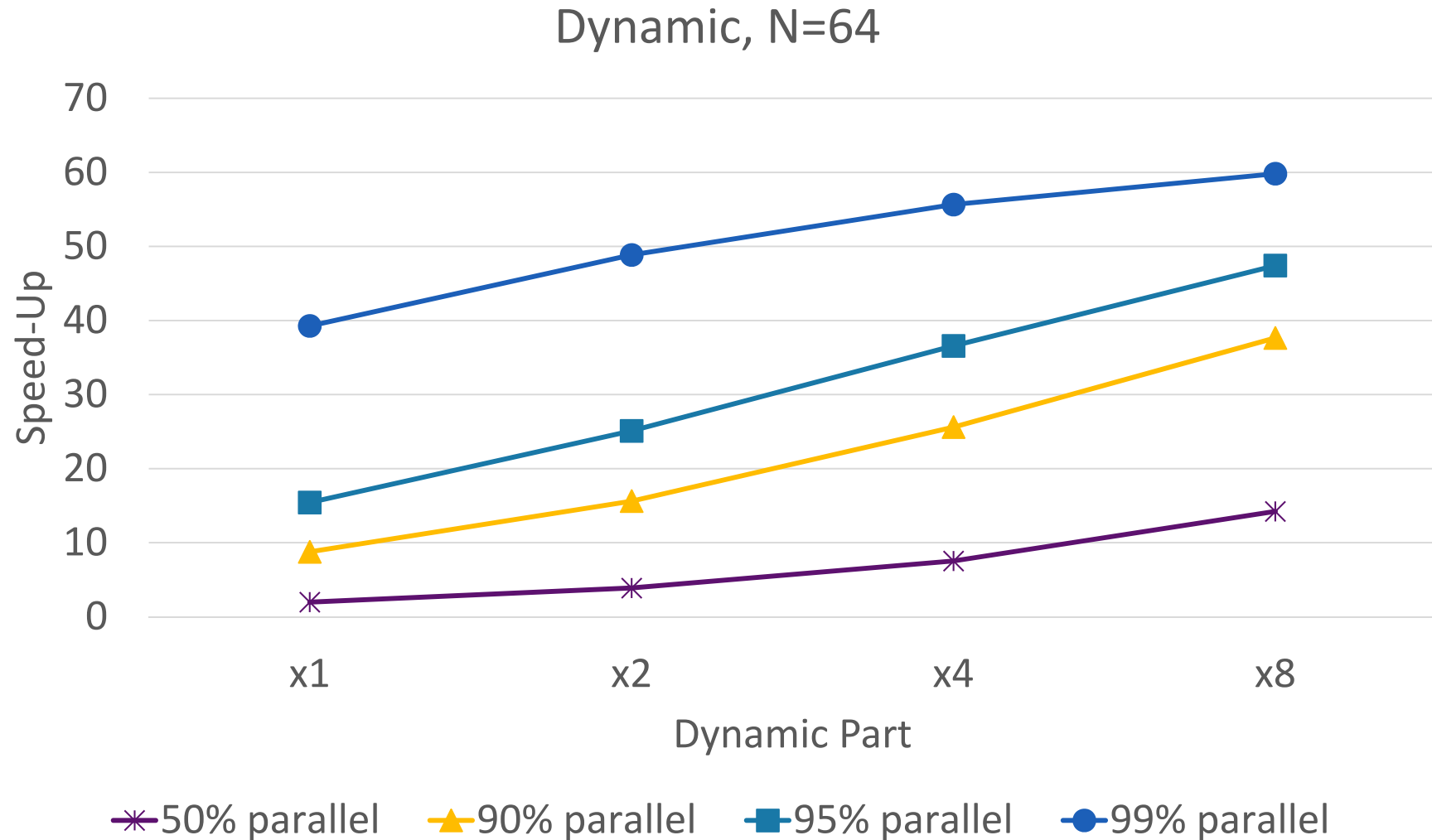
動的に変えられるようにすると、、、



Speed Up?

Speed Up?

スケーラビリティがある



Guntherの予想

- 競合や干渉を考慮。性能向上 $C(N,s,k)$ は、
$$C(N,s,k) = N / (1 + s * (N-1) + k * N * (N-1))$$
- パラメータ
 - s : 競合パラメータ (プログラムの逐次部分など。0から1の間, Amdahlの法則と同じ意味)
 - k : 干渉パラメータ (同期オーバーヘッドなど、本来のアルゴリズムとは関係のないコスト)
- $s=0, k=0$: 理想的な場合
- $s>0, k=0$: Amdahlの法則と同様
- k が0でないとき、 N の最適値がある (N_{Limit}) (= 性能向上が飽和する)

Karp-Flattの指標

- （対称型アーキテクチャ向け）Amdahlの法則から、並列化不能部分($np=1-P$)を計算することによって求まる